

## [D年] 聖霊降臨節第8主日(2020年7月19日)

## 【旧約聖書日課】ミカ書 7章14～20節

- 14 あなたの杖をもって  
御自分の民を牧してください  
あなたの嗣業である羊の群れを。  
彼らが豊かな牧場の森に  
ただひとり守られて住み  
遠い昔のように、バシヤンとギレアドで  
草をはむことができるように。
- 15 お前がエジプトの地を出たときのように  
彼らに驚くべき業をわたしは示す。
- 16 諸国の民は、どんな力を持っていても  
それを見て、恥じる。  
彼らは口に手を当てて黙し  
耳は聞く力を失う。
- 17 彼らは蛇のように  
地を這うもののように塵をなめ  
身を震わせながら岩を出て  
我らの神、主の御前におののき  
あなたを恐れ敬うであろう。
- 18 あなたのような神がほかにあるうか  
咎を除き、罪を赦される神が。  
神は御自分の嗣業の民の残りの者に  
いつまでも怒りを保たれることはない  
神は慈しみを喜ばれるゆえに。
- 19 主は再び我らを憐れみ  
我らの咎を抑え  
すべての罪を海の深みに投げ込まれる。
- 20 どうか、ヤコブにまことを  
アブラハムに慈しみを示してください  
その昔、我らの父祖にお誓いになったように。

## 【使徒書日課】使徒言行録 24章10～21節

- 10総督が、発言するように合図したので、パウロは答弁した。「私は、閣下が多年この国民の裁判をつかさどる方であることを、存じ上げておりますので、私自身のことを喜んで弁明いたします。11確かめていただければ分かることですが、私が礼拝のためエルサレムによってから、まだ十二日しかたっていない。12神殿でも会堂でも町の中でも、この私がだれかと論争したり、群衆を扇動したりするのを、だれも見ただけではありません。13そして彼らは、私を告発している件に関して、閣下に対して何の証拠も挙げることはできません。14しかしここで、はっきり申し上げます。私は、彼らが『分派』と呼んでいるこの道に従って、先祖の神を礼拝し、また、律法に則したことと預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じています。15更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱いております。16こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めています。17さて、私は、同胞に救援金を渡すため、また、供え物を献げるために、何年ぶりかで戻って来ました。18私が清めの式にあずかってから、神殿で供え物を献げ

ているところを、人に見られたのですが、別に群衆もいませんし、騒動もありませんでした。19ただ、アジア州から来た数人のユダヤ人はいました。もし、私を訴えるべき理由があるというのであれば、この人たちこそ閣下のところに出頭して告発すべきだったのです。20きもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。21彼らの中に立って、『死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前で裁判にかけられているのだ』と叫んだだけなのです。』

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書 5章19～36節

19そこで、イエスは彼らに言われた。「はっきり言っておく。子は、父のなされることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなされることはなんでも、子もそのとおりにする。20父は子を愛して、御自分のなされることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。21すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。22また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。23すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。24はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。25はっきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。26父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにして下さったからである。27また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。28驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、29善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。

30わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。』

31「もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない。32わたしについて証しをなされる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなされる証しは真実であることを、わたしは知っている。33あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。34わたしは、人間による証しは受けない。しかし、あなたたちが救われるために、これらのことを言うておく。35ヨハネは、燃えて輝くともし火であった。あなたたちは、しばらくの間その光のもとで喜び楽しむとした。36しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業、つまり、わたしがやっている業そのものが、父がわたしをお遣わしになったことを証している。』

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ミカ書 7章14～20節

- 14 どうか、あなたの杖で、ご自分の民  
あなたの所有の民である羊を治めてください。  
彼らは森の中、果樹園の中に  
一人離れて住んでいます。  
遠い昔の日のようにバシアンとギルアドで  
草をはむことができるようにしてください。
- 15 あなたがエジプトの地を出た時のように  
私は奇しき業を彼らに示そう。
- 16 諸国民は見て、そのすべての力を恥じ  
手を口に当て、その耳は聞こえなくなる。
- 17 彼らは蛇のように  
地を這うもののように塵をなめ  
岩から震え出て  
恐れつつ私たちの神、主に近づき  
あなたを恐れ敬うであろう。
- 18 あなたのような神がいるだろうか  
ご自分の民である残りの者のために過ちを赦し  
その背きの罪も見過ごされる方。  
いつまでも怒りを持ち続けず  
むしろ慈しみを望まれる方。
- 19 主は私たちを再び憐れみ  
私たちの過ちを不問にされる。  
あなたは私たちの罪をことごとく  
海の深みに投げ込まれる。
- 20 どうか、ヤコブに真実を  
アブラハムに慈しみを示して下さるように  
あなたが遠い昔、私たちの先祖に誓われように。

使徒言行録 24章10～21節

10 総督が発言するように合図したので、パウロは答弁した。「私は、閣下が長年この民の裁判をつかさどる方であることを、存じ上げておりますので、私自身のことを喜んで弁明いたします。11 お調べになれば分かることですが、私が礼拝のためエルサレムに上ってから、まだ十二日しかたっておりません。12 神殿でも会堂でも町の中でも、この私が誰かと論争したり、群衆を扇動したりするのを、誰も見た者はおられません。13 そして彼らは、私を告発している件に関し、閣下に対して何の証拠も挙げることはできません。14 ただ、このことははっきり申し上げます。私は、彼らが分派と呼んでいるこの道に従って、先祖の神に仕え、また、律法に則したことと預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じています。15 さらに、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱いております。16 こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を保つように、常に努めています。17 さて、私は、同胞に救援金を渡すため、また、供え物を献げるために、何年ぶりかで戻って来ました。18 その際、神殿の中で身を清めているところを人に見られたのですが、群衆もおらず、騒動もあ

りませんでした。19 ただ、アジア州から来た数人のユダヤ人はいました。もし、私を訴えるべき理由があるというのであれば、この人たちこそ閣下のところに店頭して告発すべきだったのです。20 きもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に店頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。21 彼らの中に立って、『死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前で裁判にかけられているのだ』と叫んだだけなのです。」

ヨハネによる福音書 5章19～36節

19 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「よくよく言うておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何もすることができない。父がなさることは何でも、子もそのとおりにする。20 父は子を愛して、ご自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたがたは驚くことになる。21 父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、自分の望む者に命を与える。22 また、父は誰をも裁かず、裁きはすべて子に委ねておられる。23 すべての人が、父を敬うように、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。24 よくよく言うておく。私の言葉を聞いて、私をお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁きを受けることがなく、死から命へと移っている。25 よくよく言うておく。死んだ者が神の子の声を聞き、聞いた者が生きる時が来る。今がその時である。26 父が、ご自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてください。27 また、父が裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。28 このことで驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞く。29 そして、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るであろう。」

30 私は自分からは何もできない。聞くままに、裁く。そして私の裁きは正しい。それは、私が自分の意志ではなく、私をお遣わしになった方の御心を求めているからである。」

31 「もし、私が自分自身について証しをするなら、私の証しは真実ではない。32 私について証しをなさる方は別におられる。そして、その方が私について証しする証しは真実であることを、私は知っている。33 あなたがたはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。34 私は人間による証しは受けない。しかし、このことを言うのは、あなたがたが救われるためである。35 ヨハネは燃えて輝く灯であった。あなたがたは、しばらくの間、その光を楽しもうとした。36 しかし、私には、ヨハネの証しにまさる証しがある。父が私に成し遂げるようにお与えになった業、つまり、私が行っている業そのものが、父が私をお遣わしになったことを証している。」

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・7月19日「聖霊降臨節第8主日」の日課主題は「復活の希望」。先主日に続いて、「復活」信仰に関連する視点で聖書日課が選ばれている。

・キリスト教信仰における「復活」信仰には、「旧約」で明示的でないにもかかわらずラビ的ユダヤ教信仰と共有している終末的「復活」信仰を前提にしながら、一方で、「キリストの復活顕現」という信仰体験に基づいて「旧約」と整合性を取りながら展開した実存的・現代的「復活」信仰が中心教理としての位置を持つようになり、複数の焦点を持つ「復活」論として教理化されてきた。

**旧約日課(ミカ7章より)**

・「ミカ書」は、「十二小預言書」の6番目に置かれる全7章の預言書。冒頭の標題によれば、預言者ミカは、「イザヤ書」の預言者イザヤ(第一イザヤ)と同時代に預言活動した預言者で、実際両預言書にはほとんど同じ預言句が伝えられており、また、「エレミヤ書」でも預言者ミカに言及する箇所(エレミヤ 26:18)があり、彼らが共通の預言者集団の伝統に属する預言者であった蓋然性が高い。ただし、「イザヤ書」が標題によれば「ユダとエルサレム」に向けた預言集として位置づけられているのに対して、「ミカ書」は「サマリアとエルサレム」に向けた預言集として位置づけられており、預言者ミカと北王国との関係性の深さがうかがわれる。預言者イザヤや預言者ミカと同時代の北王国で預言活動をしていたと推察される預言者には、ホセア、アモス、ヨナなどがある。「ミカ書」は、「イザヤ書」が預言者イザヤに必ずしも帰することのできない「第二イザヤ」と呼ばれる付加部分をもって編集・編纂されているように、後代の付加(多くの聖書学者は4章以下を付加と推定)をもって編集・編纂されていると考えられる。このような見方は、預言書の価値を減ずるものではなく、そもそもこれらの「預言書」が、歴史的預言者の幾人かを伝統の祖としながら預言伝承を継承した預言者集団によって長い年月をかけて集成・編纂されたものとしてこそ価値を認められてきた、と考えるべきである。

・日課箇所は、本預言書の末尾。聖書学者は、この部分を「ミカ書」編集の最終段階で加筆されたもので、おそらく南王国の滅亡(エルサレム陥落!)という出来事を、預言者ミカが北王国滅亡(サマリア陥落!)を眼前に告げた預言の視点で解釈する意図で整えられたものだろうと解釈している。実際、この部分は「詩編」に類似した表現や形式が取られているが、「詩編」はもっぱら南王国を背景とした所産である。「詩編」は、礼拝儀式の営みの中で生み出されてきたものである。

・20節の結語は、「ミカ書」の神学的基礎づけを示す語句と解される。この句は、新約の「マリアの賛歌」で引照されたものと推察される(ルカ 1:55)。

**使徒書日課(使徒 24章より)**

・「使徒言行録」は、初代教会形成史として描かれたキリスト教会の「正史」であり、史的事実の正確な記述よりも、キリスト教会の存立基盤となる出来事(共同体の共有する歴史物語!)や使信(共同体の共有する信仰告白!)を明示することを目的としている。

・日課箇所は、パウロが3回目の宣教旅行で諸教会から預かったエルサレム教会への献金を携えてエルサレムを訪問した結果、当局に捕縛され、裁判にかけられたことを物語る場面の一部。当時のユダヤ総督フェリクス(在任=AD52~60年頃)の裁判を受ける中で、パウロが弁明として述べたとされる発言が記されている。実際の裁判における発言の記録とは考えられないが、初代教会が共有していたと宣教使信の反映されている言説として、重要な意味を持つ。

・14節「分派(ハイレーシス)」は、「使徒言行録」で教会がユダヤ人たちから批判されるときに用いられた用語として繰り返し現れる(パウロ書簡では、教会内の「仲間割れ」を指す用語として使われている= I コリ 11:19、ガラ 5:20)。一方で、「使徒言行録」では、初代教会自身の自称として「この道(ホドス)」(14節)という表現を繰り返し用いている(明示的表現は、18:25「主の道」、18:26「神の道」)。このような表現によって、初代教会が、キリスト信仰を単なる宗教観念や抽象的な思想としてではなく、一つの明確な生き方として捉えていたことが分かる。それは、福音書が示すような「主イエスに従う道」であり、それゆえに当然のように、「神を礼拝」し、「律法…預言者の書」を指針とするものであったと考えられる。

・その基本的立場に加えて、15節「更に」と示されるのが、ファリサイ派ユダヤ教から継承した終末的「復活」信仰に関する言及である。実のところ、ここでユダヤ教と共有する「復活」信仰が取り上げられるのは、自分たちの信仰が広義のユダヤ教の枠組みの中にあるという自意識の表明であると共に、「キリストの復活顕現」という信仰経験を宣教使信の中心に置いていること(使徒 13:26~39 など)を正当化するためであろう。このようにして、本来は異なる文脈から受け止められていた「終末的復活」信仰と「キリストの復活顕現」体験が、「復活」という用語を通して結び付けられることで、「実存的・現代的復活」信仰を基礎づける統合的な「復活」神学を展開する端緒になったのかもしれない。

**福音書日課(ヨハネ 5章より)**

・日課箇所は、「ベトザタ(ベテスタ)の池」の逸話を前提とした主イエスの教えとして伝えられる箇所の一部。前章までですでに示唆されていた「父」と「子」の一体性に基づく「御子」の権威付けが示されていると解されてきた箇所。この、ヨハネ福音書で展開される、旧約の「神」と「イエス・キリスト」が同格であるという主張は、後の「三位一体論」に大きな影響を及ぼした。

・28~29 節は、基本的にはファリサイ派ユダヤ教と共有する「終末的復活」信仰に立っており、実のところ、そのこと自体は「驚く」ようなことではない。ここで「驚く」べきこととして主張されているのは、その「終末的復活」信仰で神学的基礎となる「終わりの日の最後の審判」が「子(御子)」によってなされる、という点である。つまり、「終末的復活」信仰において、神がもっとも神らしい役割を果たしてくださると理解されていた「最後の審判」の役割を、「イエス」という人の姿を持った「御子」が行うという主張であり、伝統的な「神」理解に立つユダヤ教であれば、容易に受け入れることができない主張なのである。

・ここに、ヨハネ福音書の教会共同体が展開していた統合的「復活」神学の一つの特徴が表れていると言いうことができる。ルカ・使徒言行録やパウロ書簡では、「終末的復活」信仰と「キリストの復活顕現」体験を、「洗礼」によってキリストの「死と復活」にあずかる信仰者が、「終末的復活」の事前体験(味見!)をしている、という構図で、「復活」神学を展開した。それに対して、ヨハネ福音書は、「キリストの復活顕現」体験を基礎にして、すでに信仰者は「父」と同じ権威を持つ「御子」によって「裁き」の座に立たされ、「終末的復活」にあずかっている、とする「復活」神学を構想している。

**来週の誕生日 (7月19日~25日)**

**主日礼拝の讚美歌から**

・21-6 番「つくりぬしを賛美します」(= I 79「ほめたたえよ、つくりぬしを」)は、もともと 17 世紀のオランダ独立戦争の最中に愛唱された愛国歌であったものが米国の収穫感謝祭の歌として英訳され(「We gather together」)歌われてきた讚美歌だったが、歌詞が愛国的すぎるとの批判から、長老教会の信徒 J・コリーが新しい歌詞を創作し生まれた。

・21-575 番「球根の中には」は、20 世紀中盤の米国で合同メソジスト教会が成立した時期に夫の牧する教会で音楽奉仕者として活動した音楽家ナタリー・スリースの創作讚美歌。合同メソジスト教会の讚美歌集に収録され、好んで歌われてきている。

・21-510 番「主よ、終わりまで」(= I 338)は、19 世紀英国教会の司祭ボードがこどもたちの堅信礼のために作詞したもので、1954 年版からは改訳されている。曲は、19 世紀英国教会のオルガニスト・アーサー・マンの作曲。現代の英米圏諸教派でもっとも広く採用され続けている讚美歌の一つ。

**21-6「つくりぬしを賛美します」**

**Wilt heden nu treden voor God den Heere**

1. Wilt heden nu treden voor God, den Heere, / Hem boven al loven van harte zeer, / En maken groot zijns lieven namens eere, / Die daar nu onzen vijand slaat terneer.

2. Ter eeren ons Heeren wilt al uw dagen / Dit wonder bijzonder gedenken toch. / Maakt u, o mensch, voor God steeds wel te dragen, / Doet ieder recht en wacht u voor bedrog!
3. Bidt, wakent en maket, dat g'in bekoring / En 't kwade met schade toch niet en valt. / Uw vroomheid brengt den vijand tot versterking, / Al waar' zijn rijk nog eens zoo sterk bewald!  
*(Nederlandsche Gedenckclanck, Haarlem, 1626)*

**English version by J.C.Cory**

1. We praise Thee, O God, our Redeemer, Creator! / In grateful devotion our tribute we bring; / We lay it before Thee, we kneel and adore Thee; / We bless Thy holy name; glad praises we sing.
2. We worship Thee, God of our fathers; we bless Thee; / Through life's storm and tempest our Guide hast Thou been; / When perils o'ertake us, escape Thou wilt make us, / And with Thy help, O Lord, our battles we win.
3. With voices united our praises we offer; / To Thee, great Jehovah, glad anthems we raise. / Thy strong arm will guide us, our God is beside us, / To Thee, our great Redeemer, forever be praise.  
*(Evangelical Lutheran Hymnary #466)*

**21-575「球根の中には」**

**In the bulb there is a flower**

1. In the bulb there is a flower; / in the seed, an apple tree; / in cocoons, a hidden promise: / butterflies will soon be free! / In the cold and snow of winter / there's a spring that waits to be, / unrevealed until its season, / something God alone can see.
2. There's a song in every silence, / seeking word and melody; / there's a dawn in every darkness / bringing hope to you and me. / From the past will come the future; / what it holds, a mystery, / unrevealed until its season, / something God alone can see.
3. In our end is our beginning; / in our time, infinity; / in our doubt there is believing; / in our life, eternity; / In our death, a resurrection; / at the last, a victory, / unrevealed until its season, / something God alone can see.

**21-510「主よ、終わりまで」**

**O Jesus, I have promised**

1. O Jesus, I have promised / to serve thee to the end; be thou forever near me, / my Master and my friend. / I shall not fear the battle / if thou art by my side, / nor wander from the pathway / if thou wilt be my guide.
2. O let me feel thee near me! / The world is ever near; / I see the sights that dazzle, / the tempting sounds I hear; / my foes are ever near me, / around me and within; / but Jesus, draw thou nearer, / and shield my soul from sin.
3. O let me hear thee speaking / in accents clear and still, / above the storms of passion, / the murmurs of self-will. / O speak to reassure me, / to hasten or control; / O speak, and make me listen, / thou guardian of my soul.
4. O Jesus, thou hast promised / to all who follow thee / that where thou art in glory / there shall thy servant be. / And Jesus, I have promised / to serve thee to the end; / O give me grace to follow, / my Master and my Friend.  
*(The United Methodist Hymnal #396)*